

シャルル=ルイ・フィリップと「小さな町」のこと

東海 麻衣子

修士の時、松本先生の短編速読の授業で、シャルル=ルイ・フィリップの短編「アリス」を読み、衝撃を受けた。それは、7歳のアリスが、新しく生まれた弟への嫉妬と、その弟にかかりきりになってしまった母親への意趣返しのために、食事を拒み、死んでしまうという話である。私が驚いたのは、その悲壮感のなさだった。一人の少女の不幸な顛末が、5ページ（1500語）という枚数のうちに、過不足なく、淡々と、かつ、不思議な明るさを湛えて、語られている。ドラマチックな話をこのように語るができるのだということに衝撃を受けたのである。そしてすぐ、この短編が所収されている短編集『小さな町で』*Dans la petite ville*を読んだ。すばらしかった。「小さな町」に暮らす市井の人々の悲喜こもごもが、あっさりと、ユーモラスに語られるのだが、一篇一篇を読み終えるごとに、人生を考えさせられる。私は、その研ぎ澄まされたエクリチュールに魅了され、この作家の書いた本をもっと読みたいと思った。

こうして、私はシャルル=ルイ・フィリップのことを調べ始めたのだが、知れば知るほど興味深い作家であることが分かってきた。35歳で世を去ったシャルル=ルイ・フィリップは、長編、中編、短編、詩、時評、日記、手紙等を残しているが、それぞれに違った味わいがあり、汲めども尽きぬおもしろさがある。それゆえ、多くの文学者たちに影響を与え、多くの読者に愛されてきた。しかし、残念なことに今日では、ほとんど読まれなくなってしまっている。1930年、1952年とそれぞれ三巻の全集が刊行され、堀口大學や三好達治らによって名訳が生み出されてきた日本でも、状況は同じであった。

私は、あちこちの大学図書館から、茶色くなった初版本を借りてきて、一作一作を大事に読んでいたが、そのうちに、この「小さな町」、すなわち、フィリップの故郷であり、多くの作品の舞台となっているセリイを実際に見たくてたまらなくなってきた。ちょうどその秋、パリの友人宅に赴く予定があったので、その折に、セリイにも立ち寄りたいたいと考えた私は、フランスにある「フィリップ研究会」*Association des Amis de Charles-Louis Philippe*に連絡を取ってみることにした。その時期に何か催し物はないかとメールで問い合わせてみると、すぐに快い返事が返ってきた。

「9月某日、講演会と定例会を開催予定なので、よろしければご出席ください。」

セリイは、フランス中部アリエ県にある人口 1400 人のまさに「小さな町」である。講演会の行われるアリエ県の県庁所在地ムーランからセリイまでの公共交通機関はない。私はセリイに一軒しかないホテルを予約し、その後はタクシーでもあるだろうとパリからムーランへと向かった。

講演会は地元の名士といった人々でごった返しており、「この見知らぬ東洋人は何者か」という訝しげなまなざしが背中に痛かった。フィリップ研究の第一人者として知られるディヴィッド・ロー教授の講演にも集中できぬまま、ひたすらおどおどしていると、メールのやり取りをしていた世話役のフレデリック・マルコール氏が救い出してくれた。ジャン＝ポール・ベルモンド似のととてもいい人で、講演会の後、セリイまで車に乗せて連れて行ってくれ、家族や親戚に紹介してくれた。私は思いがけず、初対面の彼らの家で夕食をご馳走になり、家に泊まれというのをそれはさすがに...と固辞したが、セリイの人々のあたたかさが身に沁みた。

翌朝、私は、ホテルから抜け出て、瑞々しい空気を吸い込みながら、「小さな町」を歩いた。パン屋さんだけが開いている時間、人影もなく、静かな町は清潔で明るかった。『小さな町で』的一幕一幕が浮かび上がる。ラルティゴ一家の子供たちが箱車を押して歩いた道（「箱車」）。ペティパトンたち酔っ払いがつまみ出された教会（「いちばん罪深い者」）。そして、作家の生まれ育った二階建ての小さな木靴屋の家（「来訪者」）。100年後の「小さな町」は、読者の期待を少しも裏切らず、当時の雰囲気そのまま残していた。

その日はその後、記念館として開放されているフィリップの生家を見学し、「フィリップ研究会」の定例会に出席し、会員の方々と食事をし、ディヴィット・ロー先生や研究会会長らの知己を得た。非常に実り多い旅であった。

フィリップを介して知り合った優しい人たちに、そして、フィリップの存在を教えてくださいました松本先生に感謝しつつ、これからもシャルル＝ルイ・フィリップの本を読み続けていきたい。そして、このたび 30 号を迎える『広島大学フランス文学研究』に発表させていただけることの喜びをかみしめながら、自分なりにささやかな研究を続けていきたいと思う。